

古代史に遊ぼう

第 53 回 —自然銅の秩父紀行—

元明天皇の慶雲5年（708）に秩父（埼玉県秩父市黒谷）から、和銅（純粋に近い自然銅）が献上されたことを瑞祥として、年号が和銅と改められたことは「続日本記」に記載されている。金属の「和銅」の読み方は「ニキアカガネ」で、「ニキ」とは漢字では「純」、「熟」に相当し、「熟して混じりけがない」という意味である。日本古来の言葉では「アカガネ」は銅で、鉄は「クロガネ」、銀は「シロガネ」と呼ばれていた。

秩父駅から秩父鉄道（寄居・熊谷行き）に乗ると、2つ目が和銅黒谷駅である。秩父市の東北を北流する荒川の東側にそびえる美の山（586.9m）の中腹に和銅遺跡がある。銅鉱の露天掘りの跡への登り口・国道140号の角に「和銅遺跡入り口」の大きな標識が立っていて、入り口から見える右手の山の



岩に「和銅」という大きな文字がある。この山の名を祝山（イワイヤマ）といい、和銅が出たことを祝って付けられた名前だという。一説では「イワイヤマ」ではなく「ユオウヤマ」で、銅の精錬をするときに発生する硫黄の匂いが立ちこめていたのがなまって、「イワイ」となったということである。祝山のもう一つ奥の山が「和銅山」であり、「和銅露天掘り跡」は山頂に抜ける裂け目が下まで総長100mを越す二条の亀裂面をなしている。地質学的には、出牛-黒谷断層に属する第三紀層（秩父盆地）と秩父古生層（チャート層や結晶片岩との破碎層）の接触部に当たり、この露出面から自然銅が採掘採取されていた。山



●写真2：宝物殿 和同出雲神社

から下る谷は黒谷といい、谷の途中は「美の山」から流れ出す豊富な水を利用して、秩父地方でよく見られる棚田が造られている。その山際を流れているのが和銅沢で、「銅洗堀」（どうせんぼり）、古くはなまって「どうねんぼう」と呼ばれた銅鉱石を洗う沢である。



●写真1：殿地（どんじ）裏を流れる銅洗堀<小滝（おたき）>

登り口から入り、すこし行くと左に聖神社がある。和銅献上の1ヶ月後に祝山に元々あった神籬（ひもろぎ、神霊の宿るところ）を移して、神社を創建してお祀りした社である。敷地内には和同出雲神社（旧本殿、縁結びの神）と宝物殿もある。

宝物殿には自然銅（17.5kg）や和同開珎はもちろんのこと、元明天皇の御下賜と伝えられる雌雄の和銅製蜈蚣（むかで）が所蔵されている。なぜ「むかで」なのかというと、「百足」と書くように多くの人を意味し、この地で和銅献上の式典を開くに際して、文武百官の代りとして下賜されたという事である。埼玉県自然史博物館の鑑定によれば、このムカデのモデルは「オオムカデ属のトビズムカデ」と考えられるという。



●写真3左：和銅製蜈蚣
（雄 13.9 cm）
●写真4右：和銅製蜈蚣
（雌 14.4 cm）

かつては歴史の教科書に、武蔵（むさし）の国秩父郡（ちちぶごおり）から銅が献上され、初めて和同開珎（わどうかいちん「ほう」）という貨幣（銀銭と銅銭）が造られ、それが我が国で最古の貨幣であると書かれていた。このことは「鉛同位体比による青銅の産地推定」（国立歴史民俗博物館、1992）の研究報告により、8世紀初めに和銅を使用した貨幣が鋳造されたことが科学的にも裏付けられている。ところが平成10年（1998）奈良県の飛鳥池遺跡から発見された富本銭は、和同開珎（708）より前の天武12年（683）に飛鳥の中心地で造られていたことが判明した。富本銭は中国（唐）で621年（推古21年）に発行された開元通宝をモデルとしたものではほぼ同一規格であるが、和同開珎はそれらよりもやや軽い。その富本銭は昭和60年（1985）奈良平城京跡からも和同開珎などと共に発見されている。その後、藤原京跡（奈良県）、難波京跡（大阪市）、さらに長野県下伊那郡高森町の武陵地（ぶりょうち）古墳や飯田市座光寺（座光寺）の遺跡からも見つかっている。飛鳥池遺跡からは40枚以上の銅銭が鋳型（いがた）や鋳棹（いざお）と共に見つかっており、この地が富本銭の製造地であると特定される証拠となった。日本書紀（天武12年）に「今より以後必ず銅銭を用いよ」と書かれている銅銭は、富本銭のことであろうと考えられる。621年（推古21年）中国（唐）で開元通宝が発行され、富本銭は開元通宝と重さも大きさもほぼ同一規格で作られていることから、開元通宝をモデルにした日本最古の貨幣である可能性が高い。しかし、貨幣としての流通量は富本銭に比べて、和同開珎が圧倒的に多かったようである。従って、和同開珎がはじめて本格的に流通した貨幣ということであるなら納得できる。和同開珎は1枚「1文」が奈良時代の1日分の労賃であり、白米1升2合（約1.8kg）が買えたとされている。



●写真5：和同開珎
（日本貨幣カタログ1994 p143より）

秩父在住の高校先輩は熱心な郷土史の研究家で、2008年島根県・隠岐で珍しい銀製の「和同開珎」が見つかったという報道があった時は、わざわざ現場を見に行く程であった。私も誘われて、隠岐・西ノ島町の黒木山横穴墓群遺跡（7世紀期末～8世紀初め）を見学したが、ここから「銀銭が出た」という表示があるだけで、特に変哲もない雑木林の斜面であった。銀銭は近畿を中心に40数枚見つかっているが、離島での出土は珍しいといわれている。隠岐は奈良時代ごろから朝廷にアワビやノリなどの海産物を献上する「御食国」として知られており、その褒美や記念品として与えられたものが、副葬されたと考えられている。「隠岐や今 木の芽をかこむ 怒濤かな」加藤楸邨、もう一人の同行者である友

人はこの俳句を紹介してくれた。一夜滞在して、海の幸を堪能出来たと思ったが、翌日松江で会った別の友人は県の水産関係で島に勤務したことがあると言う事で、事前に云えば案内も出来るのに、なぜ云わないかと叱られた。

この先輩の肝いりで、毎年奥秩父の柴原温泉柳屋旅館で一泊し、シシ鍋など土地の名物を賞味し、翌日秩父を周遊して過ごす会があった。それが10年も続いたので、ほぼ秩父の名所は網羅的に見たはずだが、最初に思い出すのは秩父で食べた蕎麦の味、この美味だけは鮮明に記憶しているが、往事茫々、後は記録を頼りに思い出すのみである。秩父へは西武池袋より特急で1時間20分横瀬を過ぎ、武甲山の麓から下りに入ると秩父盆地である。まず、秩父夜祭りでは有名な秩父神社へ、秩父開拓の祖神・知知夫彦命（ちちぶひこのみこと）がその祖神・八意思金命（やごころおもいかねのみこと）を祀ったとされている。現社殿は天正20年（1592）徳川家康が再建した権現造の本殿で、社殿の外壁に左甚五郎作といわれる「つなぎの龍」「子育ての虎」などの見事な彫刻がある。「つなぎの龍」は夜になると抜け出して田畑を荒らしたという伝説が有り、くさりで繋がれている。通りを隔てた東側の秩父祭会館には、12月に行われる夜祭りに参加する見事な山車が陳列されており一見の価値がある。また勇壮な夜祭りの映像を大スクリーンで見ること出来る。

秩父札所・34カ所観音霊場は、坂東33カ所、西国33カ所と共に、日本百観音に数えられている。秩父札所は文暦元年（1234）の開創と伝えられており、江戸時代には盛んに札所巡りが行われた。大施餓鬼会（8月）の四満部寺（1番）、仁王門の大わらじの4番金昌寺、あめ薬師の名で親しまれている慈眼寺（13番）、荒川の断崖の上に立つ岩之上堂（20番）、眺望随一の音楽寺（23番）にはヒット祈願の歌手が訪れるという、馬頭観世音を祭った橋立堂（28番）、庭園の美しい法雲寺（30番）などが先輩の好みで案内された札所である。

西秩父の旧吉田町・道の駅内にある龍勢会館は毎年10月に同町の棕神社で行われる龍勢祭を紹介する資料館である。龍勢とは農民の手作りロケットで直径12cm、長さ70～80cmの竹筒に火薬を詰め込んだもので、点火すると轟音とともに300～500mも舞い上がり、上り詰めると落下傘が開いて降りながら、仕掛けの煙火を披露する。龍勢には28もの流派があつて、館内にはそれぞれの実物展示があり、さらに龍勢発射の映像を見ることが出来る。この祭りの実況は、毎年TVで放映されているが、ときにほほえましい失敗もあつて楽しいものである。

神社の近くには秩父事件資料館もある。1882年の欧州最大のリヨン生糸取引所における生糸価格の大暴落の影響により、生糸の国内価格は暴落した。それに増税が加わり、農民の困窮度は更に深くなり、そこにつけ込んだ銀行や高利貸などが養蚕農家の生活を更に悲惨なものとした。秩父地方では1884年「困民党」が組織されていたが、請願運動や交渉が不調に終わったため、租税の軽減・義務教育の延期・借金の据え置きなどを政府に訴えるための蜂起が提案され、11月1日武装蜂起が行われた。しかし西南戦争に懲らした政府の迅速な対応により5日間で鎮圧された。この秩父事件資料館は映画「草の乱」（2004）の撮影時のセットを利用している。

（岡野 実）

参考文献：秩父学「和銅」案内編 秩父和銅保勝会 発行（2010）